

二之江の子

〒134-0013

東京都江戸川区江戸川 6-44

発行 令和6年3月1日

江戸川区立二之江小学校

校長 大須賀 慎一

～締めくくりの3月 「当たり前」の日常の素晴らしさ～

校長 大須賀 慎一

早いもので令和5年度の締めくくりの3月を迎えました。月日の流れの早さは日々が充実していたことの証であり、振り返ってみるとたくさんのことが思い出されます。二之江小学校としては、新校舎での教育活動が始まったことが大きな出来事でありました。これまで何度もお話させていただいたように、5年間かけて二之江小学校と二之江第三小学校がひとつの学校になり、二度の引越しを経験するという、大きな環境の変化がありました。そして新校舎は、新しいだけでなく、様々な思いや工夫が施されており、新しい二之江小学校にふさわしい校舎であります。誰もがうらやむ新校舎で過ごす子供たちが、生き生きとした姿でいることに、皆が笑顔になる学校であることにうれしい思いです。



校庭お披露目会でテープカット
してお祝いする子供たち

新型コロナウイルス感染症等に伴う、様々な制限によって長い年月、たくさん悩み我慢した日々が続いていました。昨年5月に新型コロナウイルスが5類へ移行したことから、制限緩和が施され、日常が帰って来たと同時に、コロナ禍で学んだことを生かした新しい取組へと変化してきました。このことにより、これまで以上に質の高い日々を過ごすことができました。ここでは紙面の都合上、一つ一つの行事や取組についてお話することはできませんが、どれもが新しくよい変化をしたことで、子供たちの活躍がこれまで以上になされていたことは、すでにご承知のことと思われます。コロナ禍においても「今、できることを」合言葉に取り組んだ二之江小学校であったことによって「できることに磨きをかけて」できた一年間であります。保護者・地域の皆様には、多大なるご理解とご協力をいただきこと、ここに感謝申し上げます。

1月1日に起きた能登地方における地震により、多くの方々が犠牲になられたこと、そして未だ避難所生活をされている方がいらっしゃる、ライフラインの復旧の道のりが遠く厳しい生活が続いていることなど、報道の数が少なくなってきましたが、忘れてはならないことであります。先日、石川県の校長先生からお話を聞く機会を得ました。「能登地方の学校では、『再開』はしたが『始業』はできていない学校が未だある。」とありました。つまりは、子供たちは学校に行くことができるようになったが、通常の教育活動は行われていないということです。学校へ行っても、授業はもちろん、給食や行事など日常には戻っていないことのようにです。また、中学生の集団避難の報道では、自宅を離れるかどうかを子供たちが決断しなければならない様子を見ました。13～15歳の子供たちが、親と離れて避難するという決断をすることに、「なぜこんな決断をしなければならないのか」と思ったのは、私だけではないでしょう。

東日本大震災の被災地の一つ、石巻の大川小学校を訪問した話を何度もさせていただいています。遺族である佐藤敏郎様から「子供たちの声が聞こえますか。ここには、日常があったのです。」の言葉は、私の教育観を大きく変えました。当たり前の日常は、実は当たり前ではなく、そこにはある意味の奇跡がある。その奇跡を日常と実感できることを大切に、一日一日を大切に過ごすことを子供たちに、そして本校の教職員に伝えています。「当たり前」に迎えることができた3月。一年間の締めくくりを、「当たり前」に迎えられたことをうれしく思い、新しい年度に向けて、たくさんの準備をしまいたします。

3月11日、本校では毎年「3.11集会」を行っています。そして、全児童・教職員で黙とうを捧げ、哀悼の意を表すと共に、忘れないことを誓っています。ぜひ、皆様も3月11日という日を大切にいただきたくお願い申し上げます。